

博士論文の要約
フェリス女学院大学審査学位論文

外国人散在地域における結婚移住女性の「定住」を問い直す
ーフェミニスト地理学の「ホーム」概念を手掛かりにー

人文科学研究科博士後期課程

大野 恵理

要約

本論文は、外国人散在地域（地方都市及び農村）の「農村花嫁」や「外国人嫁」と呼ばれた結婚移住女性（以下、移住女性）の移動と居住局面に着目し、フェミニスト地理学の「ホーム」概念を手掛かりに、移住先社会の様々な領域に埋め込まれた非対称なジェンダー構造を検討しながら、既存の研究の「定住」概念を問い直すものである。

本論文は序章と終章、及び3つの章から構成されている。

序章では国際移動に関する移民研究の理論的枠組みを提示しながら、移民の定住が段階的で数値的な指標（Castels and Miller 1993=1996）や滞在資格によって論じられてきたことを明らかにした。その上で、移住先社会の場所性や地域社会に内在する権力関係は不問にされてきた（伊豫谷 2013, Urry 2000=2006）ことを指摘した。また既存の移民・エスニシティ研究の対象地域が外国人集住地域に限定されたため、少数で散在的に暮らす地域は移民研究において周縁化されてきたことを示し、調査地域の選定意義を提起した。そして本論文の分析視角として、ある空間や場所における社会的カテゴリーや非対称な構造を問い直すフェミニスト地理学の「ホーム」概念が適当であることを論じた。この「ホーム」概念は親密な関係性において不可視化されているジェンダー非対称な社会的構造や空間的なポリティクスを浮上させるものである（Rose 1993=2001）。移住先社会の空間（場所）性の理解と居場所に潜む権力関係を問うことで、既存の研究の限界を乗り越えることを目指した。

第1章では中山間地（農村）地域における行政主導の「ムラの国際結婚」によって移住したフィリピン女性の移動と居住局面に着目し、越境的な「ホーム」を検討した。まずジェンダー化された移住プロセスのもと、農村男性にとって理想化されたジェンダー非対称

な空間の「ホーム」の実現が意図され、結婚移住女性は「嫁」として、家父長制的な空間でジェンダー不平等な農業労働や再生産労働役割を引き受け長年にわたり過重労働状態にあったことを明らかにした。しかしその一方で農村女性による販売活動への参入にし、農村の社会的営為や蓄積された社会関係資本が有利に作用する形で、ビジネスが展開されたことを示した。「農村花嫁」であるというローカルなコンテクストは、私的領域ではジェンダー非対称な労働役割を引き受けなければならなかった一方で、公的領域では住民として社会関係資本を蓄積でき、さらに出身家族との紐帯の強化と経済的支援の安定化を実現させていたことを明らかにした。結婚移住女性は、農村社会のジェンダー構造に取り込まれながらも、ローカルとトランスナショナルな空間に拡大した複数の「ホーム」を持ち、定住することを述べた。

第2章では台湾人女性と韓国人女性の「外国人嫁」のライフストーリーを軸に、家父長制的空間における「嫁」という立場を超えて社会的活動を通して紡がれる「ホーム」を検討した。彼らは抑圧的な私的領域から「離脱」し、地域の地産地消市場や多文化交流センター（仮名）へと生活空間を拡張した結果、公的領域において地域の支援者や友人女性と出会い、彼らの文化的資源が承認されたことで、社会的ネットワークを拡張し地域住民との関係性や活動空間の中に「ホーム」を持ったことを描き出した。しかしその空間にも、ジェンダー、階級、エスニシティの交差によって移住女性を周縁化する構造が埋め込まれており、彼らはその中に取り込まれていた。「ホーム」は、社会空間の中で新たに獲得されるものであったが、その空間は様々に移住女性を周縁化する軸を内包する空間や関係性であったことを論じた。

第3章では従来移民の「ホーム」とされてきたエスニックネットワークとそこから移動するフィリピン人女性に着目し、空間に潜むジェンダー構造や社会的規範がいかに女性たちの関係性に影響を及ぼしているかを考察した。まず宗教的ネットワークに基づくエスニックネットワークは、ジェンダー規範から逸脱した女性を排除しようとする排他的な空間となり分断されたことを論じた。次に日本語教室を起点としたエスニックネットワークでは、言語能力の差が対立の境界線となり、移住女性にとっての居場所とはならなかったことを明らかにした。社会的統合のために必要とされ移民にとっても重要な人的資本とされる言語能力が、ネットワーク内では対立を生み出すことを描いた。移住女性はかつて「ホーム」とした場や空間から離れ、まったく別の関係性に新たな「ホーム」を見出そうとしながら定住したことを明らかにした。

以上の検討を踏まえ、終章では全体の議論を整理し、本論文の限界と今後の課題について述べた。外国人散在地域の移住女性は、自ら社会関係資本を形成・活用し、主体的に抑圧的な家族から離脱することによって、公的領域に活動範囲を拡大し「ホーム」を構築していた。同胞女性を含む居住地域の住民とともに、ローカルとトランスナショナルな場所において複数の「ホーム」を築いていた。地域社会のジェンダー規範を自明のものにとらえない視点や言動、および長年の居住による地域社会における信頼関係の構築と世代交代により、地域社会に「ホーム」をもち、その空間を居心地のいい空間へと作り替えていくとみることができるだろう。しかしながら、彼女たちの居住が日本人男性との婚姻によって法的にも経済的にも、安定的な滞在に直結しているという制度的要因により、「性的シティズンシップ」（Parreñas 2011）に強く規定されていた。いかに「性的シティズンシップ」が結婚移住女性を縛り付けるものであるかという、居住局面における本質的な課題が浮かび上がったといえる。定住した移住女性のもつ「ホーム」が、単に家族や地域住民との安息の空間というだけではなく、同時にジェンダー、階級、エスニシティの交差により周縁化されもする空間であると論じた。

<引用文献>

- Castles, S and Miller, J, 1993, *The Age of Migration: International Population Movement in the Modern World*, Macmillan (関根政美・関根薫訳, 1996, 『国際移民の時代』名古屋大学出版会)
- 伊豫谷登士翁, 2013, 『移動という経験—日本における「移民」研究の課題』有信堂
- Parreñas, Racel S., 2011, *Illicit Flirtations: Labor, Migration, and Sex Trafficking in Tokyo*, Stanford, Stanford University Press.
- Rose, Gillian, 1993, *Feminism & Geography: The Limits of Geographical Knowledge*, Polity Press. (吉田容子ほか訳, 2001, 『フェミニズムと地理学—地理学的知の限界』地人書房)
- Urry, John, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-First Century*, Routledge, (吉原直樹監訳, 2006, 『社会を越える社会学—移動・環境・シティズンシップ』法政大学出版局).